立正観抄

立正観抄

文永 11 年 ·('74) 53 歳 最蓮房 さいれんぼう

しかんどういけつ

法華止観同異決

にちれんせん 日蓮撰す。

たっと 当世、 とうせい 天台の教法を習学するの輩、多く観心修行を てんだい きょうほう しゅうがく やから おお かんじんしゅぎょう

貴んで法華本 迹二門を捨つと見えたり。 ほっけほんじゃくにもん

いまと 今問う。そもそも観心修行と言うは、天台大師の摩訶 かんじんしゅぎょう てんだいだいし

かん 観の「己心の中に 行 ずるところの法門を説く」の一心 こしん なか ぎょう ほうもん

さんがん 三観・一 いちねんさんぜん 一念三千の観に依るか、はたまた世に流布せる達磨の かん だるま

禅観に依るか。

方便の禅観なり。 法華経の 妙 禅の時には 「正 直に方便を捨 ほうべん 天魔の禅なり。共にこれ無得道、妄語の禅なり。よってこ つ」と捨てらるる禅なり。 t 達磨の禅観に依らば、 ぜん ぜんかん だるま ぜんかん とも ほけきょう ぜん むとくどう みょうぜん 祖 師 • 教禅ならば未顕真実・妄語 きょうぜん とき もうご 達磨禅ならば教外別伝の だるまぜん しょうじき きょうげべつでん ほうべん もうご

れを用いるべからず。 しかん いっしんさんがん しかんいちぶ

依らば、 天台の本意に背くべからざるなり。もし止観修 行の観心に £ こんりゅう し天台の止観の一心三観に依らば、止観一部の廃立、 てんだい しかん いっしんさんがん よ しかんいちぶ はいりゅう 法華経に背くべからず。止観一 ほけきょう いっしんさんがん そむ そむ しゅぎょう みょうほう しかんいちぶ 部は法華経に依っ し か んしゅぎょう ほけきょう はいりゅう かんじん かんとく

て建立す。一心三観の修行は、

妙法の不可得なるを感得

せんがためなり。故に知んぬ、法華経を捨ててただ観のみ しよう やから だいほうぼう だいじゃけん ほけきょう てんま

を取って 正 となすの 輩 は、大謗法・大邪見・天魔の所為な ることを。その故は、天台の一心三観とは、法華経に依っ ゆえ てんだい いっしんさんがん ほけきょう

て三昧開発するを、己心証得の止観と云うが故なり。
さんまいかいはつ
こしんしょうとく
しかん
い
ゆえ

問う。天台大師の止観一部、ならびに一念三千・一心 てんだい だ い し しかんいちぶ いちねんさんぜん いっしん

さんがん 三観・己心証得の妙観は、しかしながら法華経に依ると こ しんしょうとく みょうかん ほけきょう

しょうこ

いう証拠、いかん。

答う。一 こた 予、反詰して云わく、 はんきつ 法華経に依らずと見えたる ほけきょう

証文、いかん。

しようもん

り。 序の中に『己心の中に 行 ずるところの法門を説く』と云え 中に行ずるところの法門を説く」。あるいはまた、 あらず。既に「己心の中に 行 ずるところの法門を説く」と もって指南となす。 乃 ちこれ終窮究竟の極説なり。故に、 止観の『正しく観法を明かす』に至って、ならびに三千を 難じて云わく、この文は 全 く法華経に依らずという文に 人これを出だして云わく「この止観は、天台智者、 ぎょう 良に以有るなり」文。 ゆえあ こしん こしん かんぽう なか すなわ ほうもん なか ぎょう ぎょう まった しゅうぐくきょう ごくせつ ほけきょう しかん ほうもん てんだいちしゃ ほうもん さんぜん 「故に、 己心の

云うが故なり。

天台の 行 ずるところの法門は法華経なるが

ほうもん

ほけきょう

ぎょう

故^{ゆえ}に、 こ の 意は、 法華経に依ると見えたる 証 文なり。 ほけきょう

ただし、他宗に対するの時は、問答は大綱を存すべきな たしゅう とき もんどう . こう

り。 ずといわば、速やかに捨つべきなり」と。その故は、天台大師は、下台大師は、東京は、東京のは、東京の大学のでは、東京の大学のでいたいに、 いわゆる、云うべし「もし天台の止観は法華経に依らいわゆる、云うべし「もし天台の止観は法華経に依らいわゆる、云うべし「もし天台の止観は法華経に依ら すみ てんだいだいし

る。文無く義無ければ信受すべからず」云々。伝教大師云わられなが、ぎないしんじゅりんぬんでんぎょうだいしい 兼ねて約束して云わく「修多羅と合わば、録してこれを用いか。やくそく。いいいのはない。あるく うんぬん でんぎょうだいし

大論に云わく「修多羅に依るは 白 論なり。修多羅に依らざ く「仏説に依憑せよ。口伝を信ずることなかれ」文。 竜 樹、 ぶっせつ えびよう しゅたら くでんしん びゃくろん しゅたら もん りゅうじゅ

るは黒論なり」文。教主釈尊云わく「法に依つて人に依こくろん もん きょうしゅしゃくそんのたまわ ほう よ にん よ

きょうもん らざれ」文。天台は、法華経に依り竜樹を高祖にしながら、 て止観一部を釈すること、全く有るべからざるなり。 経文に違し、我が言を翻して、外道・邪見の法に依っ 問う。正しく止観は法華経に依ると見えたる文、これ有り しかんいちぶ まさ しかん ほけきょう しゃく わことば ほけきょう ひるがえ まった りゅうじゅ げどう じゃけん こうそ

て、不思議の十乗十境、待絶滅絶の寂照の行を成ず」 らに円頓を明かさん」文。弘決に云わく「法華経の旨を攢め こた 答う。余りに多きが故に、少々これを出ださん。止観にこた あま おお ゆえ しょうしょう えんどん ふ し ぎ じょうじょうじっきょう たいぜつめつぜつ じゃくしょう もん ぐけつ い ほけきょう ぎよう むね じょう

P_o

文。止観大意に云わく「今家の教門は、もん しかんたいい いい こんけ きょうもん となす。慧文はただ内観を列ぬるのみ。 竜樹をもつて始祖 りゅうじゅ なんがく てんだい

で、また法華三昧に因って陀羅尼を発し、義門を開拓して、 南岳・天台に泊ん

権実・本迹を暁了すべし。方に行を立つべし。この経ごんじつ ほんじゃく ぎょうりょう 独り妙と称することを得。方にこれに依って、もって観道ひと みょう しょう ひと かんぽうしゅうび 観法周備す〇もし法華を 釈 するには、いよいよすべからく みよう しよう ほっけ しゃく かんどう きょう

を立つべし。五方便および十乗軌行と言うは、即ち円頓た でほうべん じゅうじょうきぎょう い すなわ えんどん るのみ」文。文句記に云わく「観と 経 と合えば、他の 宝 を 止観、全 く法華に依る。 円頓止観は 即 ち法華三昧の異名な しかんまった ほっけ もんぐき ょ えんどんし かん すなわ きよう ほっ けざんまい いみょう

の 人 師 筌第なり。もしこの 意を得ば、方に経旨に会す」云々。 せんてい こころ え まさ きょうし え うんぬん 数うるにあらず。方に知んぬ、かぞ を論ぜん。 摩訶止観一部の大意は、法華三昧の異名を出でず。経にまかしかんいちぶ たいい ほっけざんまい いみょう い ろん にんし かん ぎょうまん 行満の釈せる学天台宗法門大意に云わくぎょうまん しゃく がくてんだいしゅうほうもん たいい もん 止観一部はこれ法華三昧の もんしょうふんみょう 誰かこれ とうど

ほんじゃく 本 迹の 釈 を捨つと見えたり。また「法華経は漸 問う。天台、 と しゃく てんだい ししゅ 四種の釈を作るの時、 み しゃく じきだつ つく とき ほけきょう 観心の釈に至ってかんじん しゃく いた ぜん 機の ため

にこれを説き、

止観は直達の機のためにこれを説く」と、

よと見えたるや。 たとい天台の 釈 なりとも、 釈 尊の金言に のいずれの文にか人師の 釈 を本となして 仏 の教えを捨て 勝れたりと云うべきや。今の天台宗の浅ましさは、真言は らば、今の天台宗の 意は、華厳・真言等の 経 は法華経に に、止観は法華に勝ると云えるも、道理なり、道理なり。 じ いかん。 答う。 りくみつ こた 次に、「観心の釈の時、本迹を捨つ」という難は、法華経 理倶密の教えなるが故に法華経に勝れたりと謂えり。故 しかん いま 漸機のために劣を説き、 かんじん てんだいしゅう おし ほっけ もん しゃく すぐ にんししゃく こころ とき ほんじゃく ゆえ れつ いま てんだい ほけきょう けごん てんだいしゅう あさ もと しやく 頓機のために しんごんとう すぐ どうり ほとけ きょう しゃくそん なん 勝を説くな どうり おも ほけきょう きんげん しんごん ほけきょう ゆえ

うえ もと するは、本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めてのほんたい ほんぽう みょうほうふ しぎ いっぽう と さだ 背き法華経に背かば、全くこれを用いるべからざるなり。 となすに、「迹を尋ぬれば迹広く、本を尋ぬれば本高くしとなすに、「迹を尋ぬれば 述広く、本を尋ぬれば本高くし 上に修行を立つるの時、今像法の修行は観心の修行を詮
りえ しゅぎょう た とき いまぞうほう しゅぎょう かんじん しゅぎょう せん 迹の大教亡び、観心の しゃく だいきょうほろ 元よりの御約束なるが故なり。その上、天台の釈の意は、
もと おんやくそく ゆえ ゆえ てんだい しゃく こころ て極むべからず。故に、 「迹の大教起これば爾前の大教亡び、本の大教興ればしゃくだいきょうおにぜんだいきょうほろ ほん だいきょうおこ 「法に依って人に依らざれ」の故に。竜樹・天台・伝教、ほう」ょいにんいよいゆえいりゅうじゅってんだいでんぎょう ほけ きょう 観心の大教興れば本の大教亡ぶ」と釈 まった だいきょうおこ 末学は機に叶い難し。ただ己心のまつがく。きゃかながた。ただ己心の ほん だいきょうほろ

てんだい てんだいしゅう てば、何ものをか己心となして観ずべきや。如意宝珠を捨て 天台の 教 釈 を習い 失って、法華経に背き、大謗法の罪を 天台宗の学者は、念仏・真言・禅宗等に同意するが故に、 て、瓦石を取って 宝 となすべきか。悲しいかな、当世 妙法のみを観ぜよ」という 釈 なり。しかりといえども、 「妙法を捨てよ」とは全く釈せざるなり。もし妙法を捨 みょうほう きょうしゃく がしやく なに がくしゃ なら ねんぶつ しんごん ぜんしゅうとう たから こしん うしな まった しゃく ほけきょう かん そむ どうい にょいほうしゅ だいほうぼう みょうほう とうせい つみ

得るなり。

う

止観は天台の道 場所得の己証なり。 法華経は釈 尊の道 場 しかん もし止観は法華経に勝ると云わば、 どうじょうしょとく ほけきょう こしよう ほけきょう 種々の過これ有り。 しゃくそん とが どうじよう

こうちょうぜつ 相違これ有れども、 そうい 止観は天台の説法なり〈これ四〉。かくのごとき等の種々の 広長舌を大梵天に付く。「皆これ真実なり」の大白法なり。 しゃくそんな い ししょぶつしゅっせ 天台は、住 前にしていまだ 証 せざれば、名字・観 行・相似 てんだい 所得の大法なり〈これ一〉。 しかんてんだい には過ぐべからず。四十二重の劣なり〈これ二〉。法華経は 釈 尊乃至諸仏出世の本懐なり。止観は天台出世の己証なり (これ三)。 法華経は多宝の 証 明 あり。 また一つの問答に云わく、所被の機、上機なるが故に勝る だいほう さん だいぼんてん じゅうぜん せっぽう もんどう ほけきょう なおこれを略するなり。 しじゅうにじゅう ほんかい いち たほう みな しょう 釈尊は妙覚果満の仏なり。 しゃくそん しょうみよう りやく しかん てんだいしゅっせ しんじつ みょうかく か まん じょうき みようじ らいじゅう 来集の分身は だいびゃくほう かんぎょう そうじ とう ほとけ こしよう ほけきょう ふんじん しゅじゅ

権な 法華は下機のためにこれを説くと云わば、止観は法華に劣 云うが故なり。しかれども、止観は上機のためにこれを説き、 しやく 下劣なるが故に劣ると云わば、権を捨てて実を取れ。天台、げれっ ゆえ おと い ごん す じつ と てんだい れるが故に機を高く説くと聞こえたり。 実 にさもや有るら ほっけ 釈して云わく「教いよいよ実なれば位いよいよ下し」としゃく い きょう じつ くらい れば位いよいよ高し」と釈し給うが故なり。所被の機 ゆえ ゆえ き たか き しかん しゃく じょうき まこと しかん ほっけ てんだい

天台大師は霊山の聴衆として如来出世の本懐を宣べたてんだいだいし りょうぜん ちょうしゅ にょらいしゅっせ ほんかい の

ず。正直の妙法を止観と説きまぎらかすが故に、ありのしょうじき、みょうほう、しかん、と、紛 もうといえども、時至らざるが故に、妙法の名字を替えて 天台弘通の所化の機は、在世帯権の円機のごとし。本化弘通 てんだいぐっう ままの妙法ならざれば、帯権の法に似たり。故に知んぬ、 止観と号す。迹化の衆なるが故に、本化の付嘱を弘め給わしかん。ないしゃっけいしゅいゆえいほんげいふぞくいひろいたま の所化の機は、法華本門の直機なり。 しょけ みょうほう き しょけ ほっ けほんもん き ときいた ざい せたいごん たいごん じっき ほう えんき みょうほう みょうじ ゆえ ほんげぐつう

もって仏説に同ずる失、はなはだ重きなり。 「止観・法華は全く体同じ」と云わん、なお人師の釈を しかん ぶっせつ ほっけ ほけきょう どう まった とが すぐ たいおな おも じゃぎ いかにいわん にんし しゃく

や、「止観は法華経に勝る」という邪義を申し出だすは、た

付嘱と本門の付嘱とを、末法の行者に云い顕させんがふぞく ほんもん ふぞく まっぽう ぎょうじゃ い あらわ めの仏天の御計らいなり。ここに知んぬ、当世天台宗の中 だこれ本化の弘経と迹化の弘通と、 にこの義を云う人は、 ぶってん ぎ ぐきょう とが ひと まぬか しゃっけ 祖師・天台のためには不知恩の人なそしてんだい ぎょうじゃ 像法と末法と、 ぞうほう とうせいてんだいしゅう しゃくもん た

り。 づく。三世の弘通はともに妙法と名づく。かくのごとく 漢土に在っては天台と名づけ、日本国の中にては伝 教と名 夫れ、天台大師は、 あにその過を免れんや。 てんだいだいし さんぜ ぐつう ぐつう てんだい むかしりょうぜん あ 昔 霊 山に在っては薬王と名づけ、今 みょうほう にほんこく しゃくそん なか やくおう ほか でんぎょう

法華経を弘通し給う人は、在世の釈 尊より外は、三国にそ

 \mathcal{O} の名を聞かず。有り難く御坐します大師を、 きょうしゃく 教 釈を悪しく習って、失無き天台に失を懸けたてまつしゃく ぁ なら とがな てんだい とが か だい ざい その末学、

る。あに大罪にあらずや。

今問う。天台の本意はいかなる法ぞや。いまと
てんだい
ほい

せきがくとう 碩学等云わく、一心三観これなりと。 せきがくとう い いっしんさんがん

今云わく、一実円満の一心三観とは、誠に甚深なるに似いまい いちじつえんまん いっしんさんがん まこと じんじん

を得せしめんがための修観なり」云々。伝教大師云わく「今、 義 た れども、なおもって行者修行の方法なり。三観とは因の なるが故なり。慈覚大師、 ゆえ じかくだいししゃく ぎょうじゃしゅぎょう ほうほう しゅかん 釈して云わく「三観とは、法体 うんぬん でんぎょうだいし さんがん さんがん ほったい

めの能観の 心 なることを。いかにいわんや、三観とは言説 に知んぬ、一心三観とは、果地・果徳の法門を成ぜんがたし いっしんさんがん かじ かとく ほうもん じょう しかんしゅぎょう に出でたる法なるが故に、 「観修 行とは、 法華の妙果を 成 ぜんがためなり」 云々。 のうかん か こころ さんがん ほっけ ゆえ みようか によらい 如来の果地・果徳の妙法に対す じよう かじ かとく さんがん みょうほう うんぬん ごんぜつ

れば、 \mathcal{O} こた み」の境界なるが故に、 答う。 このこと 誠 に一大事の法門なり。 「ただ 仏 と 仏 と 問う。一心三観に勝れたる法とは、 可思議の三観なり。 いっしんさんがん きょうがい まこと すぐ いちだいじ ゆえ われ 我らが言説に出だすべからず。 ほう ほうもん ごんぜつ いかなる法ぞや。 ほう ほとけ ほとけ

ゆえ

故に、これを申すべからざるなり。ここをもって経文には、

きょうもん

給う。 云々。 ることを得んや。 問う。名字を聞かずんば、何をもって勝れたる法有りと知 みょうかく か まん 妙覚果満の仏すら、なお不可説・不思議の法と説き いかにいわんや、等覚の菩薩已下、乃至凡夫をや。 みょうじ き ほとけ とうがく なに ぼさつ い げ すぐ ないしぼんぷ ほうあ

構えて、秘すべく秘すべき法門なり。しかりといえども、汝 そうじょう 相 承を習い 失 うが故に、これを知らざるなり。相構えて相 こた 答う。天台己証の法とはこれなり。当世の学者は、 こころざししんみょう 神妙なれば、その名を出だすなり。一言の法これ なら てんだいこしょう うしな ゆえ ほうもん とうせい あいかま Ш. けつみゃく

なり。 でんぎょうだ いし 伝 教大師の「一心三観を一言に伝う」と書き給うこ いっしんさんがん いちごん つた たも

れなり。

問う。 いまだその法体を聞かず、いかん。 ほったい

答う。 こた 詮ずるところ、一言とは妙法これなり。 いちごん みょうほう

問う。 何をもって、妙法は一心三観に勝れたりというこ みょうほう いっしんさんがん

とを知ることを得るや。

こた 答う。妙法は詮ずるところの功徳なり、三観は行者の みょうほう せん くどく さんがん ぎょうじゃ

観門なるが故なり。 この妙法を仏説いて言わく 「道場に かんもん ゆえ みょうほう みよう ほとけと のたま どうじょう

己証、天台の御思慮の及ぶところの法門なり。こしょうてんだいごしりょいおよ うも、三千と云うも、共に不思議の法とはいえども、天台の わく「妙は不可思議」「言語の道断え、心行の所滅す」「法かく「妙は不可思議」「言語の道断え、心行の所滅す」「法 は十界十如・因果不二の法なり」。三諦と云うも、三観と云 は思量にあらず」「 言 をもって宣ぶべからず」云々。天台云 じっかいじゅうにょ いんがふ じ この妙法は諸仏の師なり。今の経文のごとくんば、 さんぜんい みょうほう しょぶつ とも ふしぎ ほう いま さんたい しんぎょう ところめっ きょうもん うんぬん てんだいい さんがん

きょうしゅ もろもろ 久遠実成の

妙覚極果の

仏の境界にして、

爾前・

迹門の くおんじつじょう 教主、諸の仏菩薩の境界にあらず。経に「ただ仏と仏 みょうかく ごっか ほとけ きょうがい ぶつぼ さ つ きょうがい に ぜん しゃくもん ほとけ ほとけ

とのみ、いまし能く究尽したまえり」とは、迹門の界如三千 しゃくもん かいにょさんぜん

だし、止観に絶待不思議の 妙 観を明かすといえども、 難思の境智の妙法は、 いちねんさんぜん わんや菩薩・凡夫をや。 は天台己証の界如三千・三諦三観を 正 となす。 迹 門 の正意 の法門をば、迹 門の 仏 が当分究竟の辺を説けるなり。 本地 これなり。故に知んぬ、迹 仏の知見なりということを。た にして、妙覚極果の知見にはあらざるなり。その故は、止観 一念三千の妙観に、しばらく与えて絶待不思議と名づくるいちねんさんぜん みょうかん てんだいこしょう 止は仏見に名づく」と 釈 すれども、迹 門の仏知・仏見 しかん ぜつだいふ しぎ みょうかん きょうち ぼさつ ぶっけん みょうかくごっか ゆえ かいにょさんぜん さんたいさんがん しゃくもん ぼんぷ みょうほう ちけん ほとけ しゃくぶつとう 迹 仏等の思慮に及ばず。 いかにい とうぶんくきょう へん しゃくぶつ 止観の二字をば、「観は仏知に名づ しかん しゃく にじ ちけん しりょ しよう しゃくもん およ かん しゃくもん ぶっち ぶっち ゆえ ぶっけん しかん ただ しょうい

なり。

問う。 天台大師、 真実にこの一言の妙法を証得したま しんじつ いちごん みょうほう

わざるや。

弘通したまわざるなり。いわゆる内証の辺をば秘して、

ぐっぅ ぐつう 外用には三観と号して一念三千の法門を示し現し給うなげゆう さんがん な いちねんさんぜん ほうもん しめ あらわ たも 答う。 内証はしからざるなり。外用においてはこれを ないしょう げゆう

問う。 答う。時至らざるが故に、付嘱にあらざるが故に、こたときいたゆえ、ふぞく 何が故ぞ、 ゆえ 知りながら弘通し給わざるや。 ぐつう 迹化な

り。

るが故なり。

問う。天台、 てんだい この一言の妙法を証得し給える証拠これ有 いちごん みょうほう しょうとく たま しょうこ

りや。

り。伝教大師御入唐の時、八舌の鑰をもつてこれを開き、でんぎょうだいしごにっとうときゃしたかぎ けつみゃくい っ し これを知らず。 灌頂 玄旨の 血脈 とて、天台大師自筆の 血脈一紙これ有り。天台御入滅の後は、石塔の中にこれ有けにみゃくいっし 答う。このこと天台一家の秘事なり。世に流布せる学者、こたてんだいいっけ、ひじょるふるがくしゃ あ かんじょう げんし けつみゃく てんだいごにゅうめつ のち てんだいだいし じひつ

道邃和尚より伝受し給う血 脈とは、これなり。この書に云 どうずいかしょう わく「一言の妙旨、一教の玄義」文。伝教大師の註血脈かく「一言の妙旨、一教の玄義」文。伝教大師の註血脈 でんじゅ たも けつみゃく ちゅうけつみゃく

りょうだいし ばんぽう する時は当に不変真如なるべし。故に、この一言を聞くに、 を見る時は応に随縁真如なるべし。五眼を閉じて無念に 住 みょうほう 万法ここに達し、一代の修多羅一言に含まる」文。 に云わく「夫れ、一言の妙法とは、 の法は、 両大師の血 脈のごとくんば、天台大師の血 脈 相 承の最要 ころに因有り、 妙法を成就せんがための修行の方法なり。三観は因の義、がようほう じょうじゅ 法は果の義なり。ただし、 とき とき いんあ けつみゃく じょうじゅ まさ みょうほう 妙法の一言なり。一心三観とは、詮ずるところ まさ たっ ふ へ んしんにょ いちごん ずいえんしんにょ 因果俱時の妙法を観ずるが故に、かくのご いんがぐじ いちごん いちだい みょうほう しゅたらいちごん みょうほう しゅぎょう いっしんさんがん てんだいだ い し けつみゃくそうじょう 因のところに果有り、 ゆえ ほうほう りょうげん 両眼を開いて五塵の境りょうげん ひら ごじん さかい ごげん ふく いちごん せん さんがん いん むね もん 果のと じゅう

とき功能を得るなり。

ここに知んぬ、「天台至極の法門は、法華本 迹未分のと しかん てんだいしごく た さいひ ほうもん だいほう ほっけ ほんじゃくみ ぶん じゃぎ

おお 大いなる 僻 見なりということを。四依弘経の大薩埵は、既 に仏経に依って諸論を造る。天台、 ころに無念の止観を立てて、最秘の大法とす」といえる邪義 ぶっきょう びゃっけん しょろん つく てんだい なん し えぐきょう だいさつた 何ぞ仏説に背いて無念 ぶっせつ むねん

の止観を立てたまわんや。もし「この止観、法華経に依ら た ほけきょう

どう ず」といわば、天台の止観、教外別伝の達磨の天魔の邪法に 同ぜん。すべてしかるべからず。哀れなり、哀れなり。 てんだい し かん きょうげべつでん あわ だるま てんま あわ じゃほう

でんぎょうだ いし い 伝 教大師云わく「国主の制にあらざればもって 遵 行 す こくしゅ じゅんぎょう

おな いちぶつじょう さんじょう さんじょう 同じからず、威儀あに同じからんや。この故に、天台の伝法 けん」文。また云わく「四依、論を造るに、権有り実有り。 ることなく、 三乗の旨に 一仏乗を建つ。六度に別有り、戒・度何ぞ同じからん。いちぶつじょう た ろくど べっあ かい どなん おな 旨を述ぶるに、三有り一有り。ゆえに、天台智者は、 じゅん 順じて四教の階を定め、一実の教に依ってじゅん しきょう かい さだ いちじつ きょう ょ 法王の教 にあらざればもって信受することな いぎ きょう さんあ おな べつあ いちあ ろん つく ゆえ てんだいちしゃ てんだい えんぽう

は深く四依に依り、また仏 経に 順 ず」文。 ふか 天台の止観、 ほんちょう 本 朝の天台宗の法門は伝 教大師よりこれを始 てんだいしゅう ょ 法華経に依らず」といわば、日本において ほけきょう ほうもん ぶっきょう でんぎょうだ いし じゅん にほん もし

借るといえども、 うをもって知んぬ、当世の天台家の人々、その名を天台山に えんぽう 伝教高祖に背き、 でんぎょうこ うそ 既に法華経に依る。あにその末学これに違わんや。違 ほけきょう 学ぶところの法門は、 まな とうせい 漢土においては天台に背く。 かんど てんだいけ ほうもん まつがく ひとびと そむ 達磨の僻見と だるま たが りょうだいし 両大師の てんだいさん びゃっけん

善無畏の妄語とに依るということを。

もうご

だ妙法の一言に限るなり。しかれども、当世の天台宗のみょうほう いちごん かぎ けつみゃくそうじょう 天台· てんだい 脈相承の秘法を習い失って、我と一心三観の血脈 てんだい せきとう でんぎょう 伝 教の解釈のごとくんば、己心の中の秘法は、 天台の石塔の血脈を秘し失 うが故に、 ひほう げしゃく けつみゃく われ うしな こしん いっしんさんがん なか ゆえ ひほう けつみゃく 天台 てんだい

さんぜん ゆえ を下す。これひとえに、達磨の教訓、善無畏の勧めなり。 ず。権実をも知らず。四教八 教をも知らず。五時五味の施化 にみよう 故に、止観をも知らず。一心三観・一心三諦をも知らず。一念 の仏法を破失せるなり。天台の本意を失い、 二妙をも知らず。法華の 妙 観をも知らず。 教 相をも知ら の底に埋めて高直に売る。故に、 三千の観をも知らず。 本 迹 二門をも知らず。相待・絶待の ぶっぽう そこ ごんじつ 我意に任せて書を造り、錦の袋に入れて頸に懸け、がい まか しょっく にしき ふくろ い くび か しかん かん は こうじき ほっけ う しきょうはっきょう ほんじゃくに もん いっしんさんがん いっしんさんたい てんだい ゆえ みようかん ほ じゃ ぎ こくちゅう 邪義国中に流布して、天台じゃぎこくちゅう。るふいてんだい いうしな L る きょうそう そうだい し しゃくそん 釈尊の妙法 みようほう ぜつだい いちねん

をも知らず。

ごんきょう 教 機 に こくそうおう 国相応の義は申すに及ばず、 どうり どうり じっきょう 実 教にも似ず

権 教にも似ざるなり。道理なり、道理なり。

と習うが故に、達磨の邪義、真言の妄語と打ち成つて、権教なら ゆえ だるま じゃぎ しんごん もうご う な ごんきょう だいほうぼうざいあらわ にも似ず、 、謗法罪 顕 れて、「止観は法華経に勝る」 という邪義を申し 「天台・伝教の所伝は、 てんだい に でんぎょう じっきょう 実教にも似ず、二途に摂めざるなり。故に、 しょでん しかん に ほけきょう 法華経は禅・真言より劣れり」 ほけきょう に と すぐ おさ しんごん じゃ こうそ ゆえ ごんきょう

背く不孝の者、 出だして、 ふこう 天台の観法を尋ぬれば、大蘇道 場において三昧 てんだい 失無き天台に失を懸けたてまつる。故に、とがなってんだいとがか もの 法華経に背く大謗法罪の者と成るなり。 ほけきょう かんぽう そむ たいほうぼうざい だいそどうじょう もの 高祖に

り。 習い失って、 真如は、ただ一言の妙法に有り。我妙法を唱うる時、 開発せしより已来、「目を開いて妙法を思えば随縁真如な しゃくもん しんにょ 己心の妙法を観ぜんには」と思しめされしなり。 迹 門を尋ぬれば 迹 広く、本門を尋ぬれば本高し。しかじ、 ここに達し、一代の修多羅一言に含まる。詮ずるところ、 こしん とうせい 当世の学者、この意を得ざるが故に、天台己証の妙法 と思って、 うしな 目を閉じて妙法を思えば不変真如なり。この両種

め と みょうほう おも ふへんしんにょ みょうほう たず がくしゃ いちごん いちだい しゅたらいちごん ふく 「止観は法華経に勝れ、 かん しかん ほけきょう 法華経を捨てて止観に付き、止観を捨てては非はきょう。すしかん。つしかん。す しゃくひろ こころ みょうほう え ほんもん たず おぼ みょうほう われみょうほう ゆえ 禅宗は止観に勝れた ぜんしゅう てんだいこしょう おも もとたか とな しかん ずいえんしんによ とき みょうほう ばんぽう

ぶっきょう を信ずるが故なり。 にゅうめつ その教法は藤のごとし。各々に諍論すといえども、 仏も を観ずれば見 性得達するなり」と云う大謗法の天魔の所為 れ藤枯れて後、いかん」「上らずして一枝」なんど云える天魔 の語を深く信ずるが故なり。「修多羅の教 主は松のごとく、 禅 宗に付くなり。禅 宗の一門云わく 「松に藤懸かる。 松枯 仏教は月を指す指なり。 入滅して教法の威徳も無し。ここに知んぬ、 ことば きょうほう つき けんしょうとくだつ きょうほう ふじ しん いとく ゆび ぜんしゅう ゆえ ほとけ のぼ おのおの じょうろん 禅の一法のみ独り 妙なり。 ぜん いちもんい いっぽう じゅみょうむりょう しゅたら ひとえだ まつ だいほうぼう ひと きょうしゅ じょうじゅうふ めっ みよう まつ 修多羅 てんま

しかれども、法華経の仏は、寿命無量・常住不滅の仏

ほとけ

ほけきょう

なり。 法華の義なり。法華の奪の義をもっての故に、 真実 常 住 の法と云うが故に、外道の常 見なり。 げどう しんじつじょうじゅう てこれを言わば、仏 の方便・三 蔵 教の分斉なり。 てこれを言わば、ただ外道の邪法なり。与は当分の義、 に背く僻 見なり。禅は、法華経の方便・無得道の禅なるを、 「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」の金言 そむ びゃっけん ほう 禅 宗は滅度の 仏 と見るが故に、 ぎ ほう ほっけ ほとけ じゅう ぜん ほとけ だつ げどう ほうべん さんぞうきょう ほけきょう ゆえ ぎ せけん じゃほう げどう ほうべん むとくどう ゆえ そう じょうけん ぶんざい じょうじゅう 外道の無の見なり。 げどう ゆえ とうぶん 禅は天魔 ぜん もし奪っ もし与え けん てんま きんげん

外道の法と云うなり。 問う。 禅を天魔の法と云う証拠、 てんま ほう しょうこ

いかん。

答う。前々に申すがごとし。